

---

# 君がいない

啓

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】  
君がいない

【Nコード】  
N0938D

【作者名】  
啓

【あらすじ】  
彼は彼女がいなくなる事により、彼女が何を思っていたのかを知る

朝、いつもと同じように学校に行くが、そこに君はいなかった。いつもなら、僕が来るまでにいて元気よく

「おはよう。」

と言ってくれていた君が、今そこにはいない。そう、君はこの日を境に僕の目の前から消えた。

僕は、いつものように起きて学校に行く準備をしていたが、この日は珍しく学校に行きたくなかった。なぜかはわからなかったが、何か嫌な予感がしていた。僕は、それでも休んではいけないと思い、いつもと同じ時間に学校に向かった。

学校に近づくにつれ、嫌な感じがましていくが、僕は気にせず学校の校門を入り教室に向かった。教室の前まで行き、ドアを開けようとした。

そのときだ。僕の中にあつた嫌な感じが、破裂したかのように無くなった。僕は不思議に思いながらドアを開けた。

そこは、いつものように騒がしく、僕を見てみんなは

「おはよう」と声をかけてくれたが、いつもいるはずの君が今日はいなかった。僕は、不思議に思ったが、たまにはこんな事もあるのだろうと思い、あまり気にしなかった。

でも、もうすぐ学校が始まるというのに君は来ない。さすがの僕も心配になってきた。そして、君が来るよりも先に先生が来て、みんなが席に着くが、やっぱり君は来ないままだ。

今日は、休みなのかと僕は思った。だが、君は僕と同じで一度も学校を休んだ事がなかった。

そして、君が来ないまま授業は始まった。一時間・二時間・三時間と過ぎても君は来なかった。

昼休みになり、弁当箱を取り出す人、食堂に食べに行く人と分かれた。

いつもなら、君と僕は庭の方へ出て、一緒に御飯を仲良く食べているはずが、今は僕、一人で御飯を食べている。

今日は、もう学校に来ないのだろうか？僕は先生に聞くが、先生は「知らない」と言う。だが、僕には先生が嘘をついているように思えた。先生は、何かを隠しているに違いないと僕は考えたが、根拠がなかった。

でも、君が連絡もせず休むような人間には思えなかった。だから、僕は何度も何度も、先生に君の来ない理由を聞いたが、先生の答えは常に一緒に

「知らない」の一言だった。

僕は、他の友達にも聞くが、君が来ない理由はわからなかった。昼休みが終わり、授業が始まって、君は来ないままだ。

今日、朝の事を僕は思いだした。あの嫌な感じは、この事だったのだろうか・・・。僕は急に不安に包まれた。

君の身に何か起きたのではないか、何かの事件に巻き込まれたのではないかと考えた。

それなら、先生が知らない理由も納得出来るのだが・・・。

でも、よく考えたら。その場合は、家族の人が学校に連絡してくるはずだ。

僕は、君が来ない理由を学校が終わるまで、ずっと考えていたが、結局わからなかった。

君の家に、直接行けたらよかったんだけど、部活が忙しいので今日は諦めて、明日は学校に来ていればいいなと思い僕は眠った。

次の日、いつものように準備をして学校に向かった。

今日は、君が来ているかを考えながら、学校に向かい、校門を入り教室のドアを開けた。

僕は、ドアを開けてから教室を見渡したが、君は今日もいなかった。

そして、君よりも先に先生が来た。僕は、先生の顔を見て驚いた。いつもとは違う顔つきで、少し先生の表情は暗かった。

先生は、教卓の前に着くとクラスを見渡し、話し始めた。

僕は先生の話しを聞いてびっくりした！まさか君が……。

僕は、先生が話を終わり教室から出て行った後を追いつ、もう一度君の事を聞いたが、答えは同じだった。「あの子は昨日、急に引越したんだよ。」先生は、そう言い僕の前を歩いて行った。僕は、頭の中が真っ白になり、今日の授業には集中できず、学校が終わるなり走って君の家に向かった。

こんな時に、部活などしてられないからだ。例え部活に出ても、集中してできないから、怪我をするかも知れないと思い休んだ。

やっとの思いで、君の家に着いたが、すでに人の気配はしなかった。確かに君は、引越をしたんだと思ったが、僕は君とよく行った二人の秘密の場所に向かった。

君とよく、夜に出かけたあの場所へ、ゆっくりとした空間で二人星を眺めながら話をした二人だけの場所へ。

その場所に、行ってもやっぱり君はいなかった。

だが、そこにあるベンチの上に、手紙のようなものが置いてあった。僕は、その紙を広げて読んでみた。

（あなたが、この手紙を読む頃には、私はこの町にはいないと思います。

本当は、あなたに言うてから行こうと思ったのだけど、言うて辛くなるので、言わずに行くことにします。

きつと学校では、引越をしたとしか言っていないと思うのだけど、本当は違うの。

私の体が弱いのは知っているよね。

私、自分の病気を治すために、アメリカに行くことにしたの。

だけど、必ず成功するとは限らないから、あなたには内緒で行こうと思ったの。

確率は五分五分だから、あなたは必ず反対すると思うの。

もし、あなたに止められたら私……。

絶対に行けなくなってしまうから、私は病気を治したい。だから、

ごめんなさい。勝手かもしれないけど、アメリカに行つて来ます。もし、よければんだけど、私が帰つて来るまで待つてくれるかな？もし、成功したら二ヶ月ぐらいで帰れると思うんだ。帰つて来られたら、必ずここに来るから。それじゃあね。また、会えたらいいな。)

手紙はここで終わつていた。僕は、君の事を考えていなかった。君がいない間、寂しくなるけど僕は君が帰つて来るまでずっとここで待つよ。

毎日ここに来て、君の無事を祈るよ。

彼と彼女がその後、会えたかどうかはわからないが、こんなに思ひあつてゐる二人を離すことなど出来るのだろうか？私は、決して出来ないと思う。

もし、二人が会うことが出来なければ、私はこの世に神様などがあるはずがないと、思つてしまふだろう。もし、神様がいるとすれば、この二人が必ず会えるはずだ。

私が神様なら、必ずそうするだろう。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0938d/>

---

君がいない

2010年12月18日16時08分発行